
友達エッチ

さくらりり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

友達エッチ

【Nコード】

N8952G

【作者名】

さくらりり

【あらすじ】

誰でも一度は経験した友達以上恋人未満のせつなく壊れやすい友情と恋心。男子優勢のクラスに突然転校生が・・転校生は主人公舞の友達か恋人か

1・出会い

「あーやばい、今日も遅刻だ。」

舞は自転車を立ちこぎでガンガンこぎ走ってた。いつもの見慣れた朝の風景だ。

他の生徒の背中を追い越し校門を目指す。そのとき、「おっ、舞おはよつ。俺も乗せて。」

舞は自転車のブレーキをギツと握り後ろを振り返るとヒロがダルそうに手をあげていた。

はっつ、瞬。舞は風にいいだけバサバサにされた髪を必死で直した。

「おはよ、いいよ乗って」あーなんで今会っかな。舞は寝起きの顔とぼさぼさな髪をヒロに

見られないように少しうつむきながらヒロに言った。でもヒロと朝一緒になれた事と自転車で

二人で乗れる事がうれしかった。

「舞、こげ」ヒロが自転車の後ろにドカッと座ると舞に言った。
えっ？私運転？

こういうのって普通、男がこいで女の子は後ろでお姫様座りでしょ。舞のささやかな夢は一瞬で終わっ

た。

何とか遅刻せずに間に合った舞は授業が始まるまで、朝のメイクに勤しんでた。

担任が教室に入ってきててもまだ生徒たちは話たり、朝ごはんを食べる人、教室に入ったとたん

寝る人それぞれだった。

「おまえら、座れ。食うな。しゃべるな。起きろ。」担任の高田がいつものように大きな声で

言った。「お前らよく聞け。今日からひとり増える。」

クラスの中で中心的なヒロが「もしかして転校生とか?」高田はニヤツとした。

するとヒロが「マジで?もしかして女子?」高田はまたニヤツとした。

ヒロはテンションを上げ「かわいい?」高田はヒロの質問に答えな
いまま「川崎さん入って」と廊下に

向かって言った。クラス全員が一瞬シーンとなってみんな一斉に
教室の扉が開くのを待った。

ガラツと扉が開くとそこにはすらっと背が高く、体型の割りには顔
が小さい男子が教室に入ってきた。

「えーっつ」 「男かよっ」 教室の中は大ブーイングだった。舞のクラスは男子7 女子3という男臭い、女の目を一切気にしない男が主導権を持つクラスだった。

「俺は一言も転校生が女とは言っていないぞ。お前らが勝手に勘違いしてんだろ」高田はヤツタという

顔をしながらみんなに言った。 「川崎、適当に自己紹介して」

「川崎 瞬です。よろしく」

瞬は少しかつたるそうに言った。「じゃ席は・・・」高田は教室を見渡し空いてる場所を目で探した

ヒロが「たか、俺の横空いてる」ヒロは楽しげに自分の横を指さした。 入学以来初めての転校生とい

うイベントにクラス中少し浮かれていた。 舞もその一人だった。

ヒロの横って事は・・・私の後ろだ。 転校生が男子で少しがっかりした舞だったが、自分の後ろの席

にくる事で舞もこのイベントに参加した気分だった。

高田が「ヒロと舞、川崎の机とイス用具室から持ってきて」ヒロは「あ、めんどくせと小さく言つと

「舞、行くぞ」と言い教室を出た。 舞は小走りでヒロの後を追った。 瞬も舞の後について教室

から出た。「瞬でいい?」ヒロが言った。瞬も「ああいいよ」と言い終わる前にヒロが「どっから

来たの? バスケ好き? 彼女いる?」聞きたい事全部いいました。つて感じて瞬に聞いた。

瞬は「札幌から・・・バスケまあまあ・・・彼女いない」聞かれた事全部に答えた。

「お前おもしろいな」ヒロが言った。「なあ舞 瞬ておもしろいよな」突然話を振られた舞は

「あ・・・うん」と話を合わせる風に返事をした。

用具室につくと適当な机をヒロが持って、「舞、その辺にあるイス持って」と言った

舞がイスを持とうとすると瞬が「いいよ、俺持つから。」というイスをガツと持って用具室から

出た。ヒロは舞と瞬を見ていたが、何も言わずに部屋からでた。

教室に戻ると、授業は始まっていた。ヒロは自分の横に机を置くときささとマンガを読み始めた

瞬も席につくと暇つぶしにケータイを見始めた。

瞬はあっというまにクラスになじんでいった。「瞬、昼休みバスケしない?」「いいよー」

舞のクラスの男子は昼休みに体育館でバスケットをするのが日課になっていた。 昼休みを過ぎて5時限目

になっても戻ってこないのはよくあった。 授業中もとりあえず教室に居ると単位をもらえるような

学校で、授業中はマンガを読むか、友達と話すか、たまったメールを返信するか、寝るか。といった

いい学校だった。 ヒロと舞、そして瞬の三人は授業中よく話した。

昨日のテレビやあのアイドルがかわいいとか舞の好きな芸能人のブサイクネタとか・

「ヒロと舞って付き合ってるの？」 突然 瞬が言った。 舞は顔を赤くして早口で「っ、付き合ってるよ」

なんかないよ」といった。 ヒロは舞の顔を見て「お前 何顔赤くしてるの？ 俺らは親友？ いやレス

トの時は戦友？ そんな感じだよな？」 舞はあわてて「そう、そうだよ。付き合ってるように見え

た？」 瞬に聞いた。 瞬は「そーなんだ。 ならいいや」 舞が何か別の話題を必死で考えているうちに

チャイムがなった。

2・一生のお願い

体育の授業のあと、舞と瞬は二人で体育館で後かたづけをしていた。すると、瞬が突然「舞ってヒロの事好きなの？」と言ってきた。

舞は突然の瞬の質問に少しビックリしたが、「うん、でも片思いだけどね。」「なんで告らないの？」と瞬は不思議そうに舞を見た。すると舞は「今まで誰かに相談したくても心の中の本音を言える男友達がいなかった。でも、瞬になら言えそうな感じがする。」と少し顔を赤くし瞬をまっすぐな目で見た。

「ヒロの事をいつも考えて、目で追って、一言でも多くヒロと話したい、ヒロの特別な一人になりたい

ヒロの事いっぱい知りたい。」舞は一度も息継ぎをしないでイツキに瞬に言った。瞬は少し驚いた感じで「なんでそんなに好きなのにヒロに言わないの？」と聞いた。舞は急に声を小さくし「もし、私がヒロに告って、ヒロは私のこと友達としか思ってたならこの関係が無くなるのはイヤなの、万が一、付き合えたとしてもヒロが私の事好きじゃなくなって、別れたら・・・いろんな事考えると簡単に告れないよ」瞬は「じゃあ俺が舞の特別な友達になる！ヒロやまわりの関係がどうなるかと俺は絶対舞の特別にいる！なら恐くないでしょ？」小さくうなずき瞬には聞こえないくらい小さな声で「うん」舞はこんなにやさしく、強い、まっすぐは人とは初めて出会った。

舞と瞬はこれ以来、頻繁にメールや電話をするようになった。内容はほとんどヒロ情報で、瞬は自分の知ってる事全部、舞に言った。舞も好きなものや、はまってる事、どうでもいい話など二人の連絡網は続いた。

授業中いつものように教室では寝る人、お弁当食べる人、マンガ読

む人、しゃべる人とみんな好き勝手にやっていた。舞は数少ない女子の中でも仲がいい沙紀と昨日のテレビの話をしていた。突然、男軍団がドツと笑い出した、「ヒロ！お前のそのたとえありえない！！」男子が何かヒロのこと言ってる。舞は全神経をヒロ達の会話にむけた。ヒロが「だから俺は付き合うなら処女はヤダって！痛いだけの心の準備だの、恐いだのマジでめんどくさい。たとえ言うなら、買ってそのままのカップラーメンもらうより、お湯入れて三分経ったカップラーメンもらうほうがいいのと一緒に！」テンション高めで言う、そのたとえで男子軍団はまたドツ！と笑った。

舞はまるで自分の事を言われているような感じがして愕然とした、なんでよりによってヒロがそんな事言うのか、いろんな事を考えているうちに授業は終わった。その日の夜、瞬からおもしろ画像付のメールがきたが舞は返信しなかった、しばらくすると電話が鳴って見ると瞬からだった、きつと、気をつかって電話をくれたと思ったが今日は誰とも話したくないと思い、出なかった。

そして次の日いつもの舞の朝の自転車猛ダッシュ、前に瞬の背中が見えた、昨日の電話のことがちよつと気になったが元気に声をかけた、「瞬、おはよ！」瞬は後ろを振り向き「あつ、舞おはよ。昨日おもしろ画像送ったの見た？早く見てほしくて電話もしたのに・・・」「ごめん昨日早く寝ちゃって」舞はごまかした。「瞬、乗る？」瞬はすぐに舞を後ろに押し自転車をこぎはじめた。舞はビククリした。これって憧れのお姫様乗り！？前に一度ヒロとも同じことがあったときは違う。瞬はためらうことなく自転車をこいでいる、あー瞬っていいやつ、瞬のいい香りが風と一緒に舞にかかる。癒しの時間はすぐに終わり、二人は遅刻し、図書室の整理を高田から命じられた。

放課後二人は誰もいない図書室で本の整理をしていた。何冊も重なった重い本を持ってくれる瞬、ほんとこいつっていいやつ。舞は勇

気を出して瞬に言った、「瞬！一生のお願い私を処女じゃなくして！」しばらく沈黙が続いた。やばいこの状況、私何言ってるんだろう後悔した。瞬が「いいよ」「一言言った。また沈黙が続く」「じゃ今日家来る？」舞はただうなづくことしかできなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8952g/>

友達エッチ

2010年10月20日03時46分発行